僧5
118
4

曽1門
118
4

陽明文庫

南嶺遺稿巻之四

秋齋桂先生著　門人　細谷文卿校

（六）みづ干如木とゝ裝束。水干とゝ云ふ事代
類裝束とゝ云ふ。一つの服の名とゝ。裝束の名とゝ
云ふ。元来水干は狩の名とゝ。裝束の名とゝ
ぞいごんやうゝ張くのうとを不用猟の変也。水張
みづく干とゝ云ふ。古の上記録ゆゝ水干
の袍水干の狩衣とゝ。一つの服の名とゝ
類はたゝく張くるを如木とゝ。如木の裝如木の袍狩

古来の出よりて。歴代よりありくい。元服祥賀の門出乃
ちなれ。巻を延るものをしり。白き強張のたやうぞくを
ぞうくおを進ものの如本とおかへしう。役人の名目
とい遠ものし。如本い衣をたらく張るたるまく。職
名ほあるを文字の通り

(七十) 十干の論 兄ほたく六支ほたく六支あり。
辰午申戌子寅は六支い兄ほたく。巳未酉亥丑
卯い弟ほたく。都く證文ちがるは遠ひちしば
ば文ちがるし。年号の十一年十二年をい年紀
ちがるれよ。證文は十干十二支を入るる故実よ

しく元和の市捉りもたくう都く壬申をくいい
水氣のをもい年。木氣のをもい年をいい年をて水の
兄木の兄ある。癸乙をて水氣木氣の和ちある
年といいまりて。水の弟木の弟といいたく兄ほたく
ちを辟ぶ壬ちがぞ具年の水氣をく。水氣をなる
たちぐををもぶく。癸をめを弟ある故水氣和ほ
従く万和を和をる級をるるく。は公得ままく十二干
の理をたるをし

(八十八) 十干の伝。十干ほたく。甲をんく始と
を。甲い則ちひとまほ字上へ出をるのゆ

十干の始まるなり。乙は草木の芽出ふるなり。丙は柄と通じ物の枝なる故一切のものの柄あり。火は四方へ別を安く枝のごとく盛なるものゆえ丙の字を用ゆ。丁は丙位官の下にを居士なり。丁とは故なり。百性を人歩取夏を役丁と云ふ。日本にも仕丁あり云一向下くの夏く。其丙より從ふく作りなく公く代は物を出るなり。戊は五行の中央にて四方を守る徳を已は己れも物なり。物を治める字。其四方をつゝむ公也。戊は土なり。其氣うごかれば万物生ぜ

を其氣働を出す徳なり。壬は陰陽の始なり。水氣万物をうるおす。物を治る水面より顯まれ。四ふりなく天地をうるほす。癸は其天地の水徳人々へ配り作る。人の身を潤を水徳。まゆ人医出よ。甲を十二ありて天癸至るとあるは。始く強水おこるとゆゑなり。是ゆえ癸は甲に生ずる。庚は金徳の出ることなり。荒金の意。辛は金氣の面あらはる。福ある金の意。又行を又味は能なる物。金の味は辛しとあり。夫ゆえ人辛の字成用。右十干の次第い居士なる定なる事なり。日本にて此次第を

とんくいみ〳〵しう年紀を取り出すこと。其年小主
なる水氣なれども火氣なれども弱く天地の運とる
也。俗にいふ火性本性といふを紀をあらはす。
自然しかのえかのとゐ生れる人は年德の人といふ
をし。きのえきのとゐ生れる人は木德の人といふ
金德の人ひのえひのとゐの年は是火なり。この変
まあるべし。軍をもつて。敵と爭ふ。其年火德なる故
火刻金の力程なく。嗜むものあるべし。然
も軍いやしみを得ざる変ある故なり。聚まいつひ
かくしつ。千年をふけさるべし。

玉垣の傳

(九九) 延喜大神宮式より。鋸を後世のこぎりと点してよるい
いうぐ。これを今云詞より所ることなり弔掘るより
鋸とみくの保筭利なるべし。延喜式より真字を
鋸とのせ。四外宮延暦儀式帳より乃保幾利と書
くべし。ほりへのぢをくいおへ引るの故のがせきりの
ふるをかくはこのいにしへ出るなるべし。又儀式帳より幾
ところも立削といふものあり。立削鋸ともいふ小斧
といふものの別なるべしよ移しく云大鋸なり
(九十) 史記漢書の。天門志五行志年の考へやうまづ

方角を定めく。東木。南火。北水。西金。ふた全体の居所の色。ようなる青。夏赤。秋白。冬黒。土用黄。すべて其青かるべきか。東は白き雲。こまかなる棚引。秋ぐもまたんく。金剋木。西より東の木をかる道理なり。草木成就せず。依く茅ぐ。高おそなりとなんぞ。草木成就せず。依く茅ぐ。高おそなりとなんぞ。近年の天経或問へ遠し。五雲を見んこと早し

(廿二)厠の字い元。両足まくるなる鮮の字にて。厠水とつくれい。谷二つの中をなる所をいふ。其こゝよりまくけなる字にて今の糞をとる所よ。借り用ふ。唐土にもく其通ゝく。依く文章などよ厠水流とけなる所。糞溜なる水のこゝろなく。いまの糞水のゆゑあくそ。又ふるく茅とつくるものなし茶湯とつくるなる。古記にもあるとく今の薄茶の変ていおし。今の茶湯い珠光紹鴎利休など。以後つ書今の茶湯とつくる起なり教茶屋とつくるの出来く。客人の高台用を叶へる処を拵るよ雪隠ふるくこれ屋根なくていくと屋根をさしらゆるつ雪隠の字おくり。茅屋の説く。雪隠の字古出まはんべ

㊀白樂天の詩集文集に引用せられし日本の古文多く白氏文集より
大きふるれを用ひ。日本の古文多く白氏文集より
ふるく。作りたる。唐土のくらを白俗とそくまくへ
ども。日本の風よい能りものく。又古来の和歌を
多くい白氏文集のうるをとらく。讀る歌多し
と公得く見るべし

㊁主義といふの古来ちうしものく。明朝の頃
日本へ入りしものく。夫らおい唯文鎮とのみ考
しく。九く式ハ獣形鞏ちの作りく用ひしら長く
伸べらはちうしくのぐらあて あるべし。主義

らはそひがらし

㊂詞の面よりけりと為る文ぶし作りやうよ面め
らなてみたんよりふ今一際きびしく面んとおうへば
きとうるく文章をふ市をひきとあるハ市屋
いりとそりつり語せつくきしきうこ。中臣祓よ
うしちまきと云もうしく奉星りとそとぶし
きしくえうなく芝ケリの及キあり芝りを畧
しらはめくうひるものく之於と二字をふとうを
諸の字一字ふつくうれとうまるく之於及諸るれ
ハくこれも之於と云り諸の字きびしく又而已

反耳なる故まことに一字なくや仏漢文例を
ふるまでも文章とはいひがたし。
きしき歌とても。二字なるべきとはいも
あらとはいも。和文とて皆是をのをふるまして其内は
きいをこゝ現在のこゝろもはたらきをうい変しく
きをのこゝろ結く　さしてこゝろ其をこゝもなりこゝと
はいも是い今月おはるくきちはも。見あふるる
こゝはも自然と詞はよを是をの仏あるも
聖徳太子仏法信仰の人にて日本にて仏法
の基礎をなしたまふ。其比まくい神道の風

俗はまりしく傳はる故。中くにの神道すら
らはも。太子の学問のちれやすも。神道を表わく
問仏道を学ひたまふ。勿論仏法をふるを
子時代より五家を撰ん人のを列れて下く
はは列まぐはうの。其證拠はよい天台三論宗
なりはれう倶舎宗華厳宗などふふる別
まこう。五家はのを列まくくしくへ行きぬ人はよ。末代
はをくこゝの宗旨はるを。仏法の下くへ列
ばいやまもはるるべ。弘法大師。傳教大師の後く
のく天台真言は後の宗旨い見れあるこ。家

厳上人よりこれをうけたり。出家も二条紀氏。学問と行状と兼備り。孫べ出家よりはるかに故いまの宮ゝ出家も多かれども。神道も其通ずる天子のまつりのごとく下ゝの神道といふべきもたるべし。日用を勧めく紀氏自然と神儒ともあるべしふ今の世より下ゝの神道といふ名目あるべふ紀氏の皆神道と其、時分人々質素にたゞしかるべき神儒といふ名目はかりなく。紀氏亦神儒よりあるべく曲直ところ多くをうしなふ事あるべふことよ神儒の罪人多し下ゝ愚かなる紀氏。おを

こゝろをくるくるまい乱の如く。神道者とゆうものいかへ管くちなるべし。春の字紙除く神儒といふ変いまをしく。自然と日を通用の如く。神儒といふ我国の道と神の字紙不付しも。唯道とゆふ儒也。但し天子市血脈市お讀の度い神霊不測なる若き多し詞よのくらふぬをうあれば。神儒ゆゆ色ゝ

(九六) 上代い少彦名命の伝傳のごとく。異国の方ゝ不伝丹波氏の先祖後漢の孝霊皇帝の曾孫高貴王の子志賀手直日より渡り。丹波の国よ

住を此子孫二つに別て一つは丹波氏にて禁中の典藥の門に一つは坂上氏にて代々禁裡に住しく坂上田村丸なりしが又和氣とかゝる半井家なり是は日本の天子惟仁天皇の末孫和氣清麿が末なり。まつたく丹波の家より相續して半井氏は和氣より別れたるゆゑ丹波の金流とあらはれ和氣丹波兩家とも日本醫道の大家となる

九七　日本は世界の門にて少陽の國なる故人の心も陽氣強く剛くて情慾おろかなる武勇あり。おろかなる故多く婚姻ふかく人心氣強きゆゑ日月氣強きゆゑ十二年のとき

ちかき年の年のごとし。前後ろ多あり。和を男とあり。ごとくあるゆゑ故に行ふ所の道すべてはよみの。まくまくの手まくかくさに表あるをしれをたちまち敢て少陽の氣風なり。唐土は又日輪のめぐる中なるゆゑ日氣をうけこゝろ三十年もう四十年もその間のことし。人氣強くかるゆゑ。あるは日月ちかきゆゑ武勇いまだ立夫をうしなくゆゑ勝負をおゞえ。至極丁寧なる志少く、父子の法をよく行き。學問の本國なり。天子は又日の沒する國なり。たゞ人もそいなり。六七十年

ちゃ八九十年ばかりまぐの間のごとし。日月走るがごとくあるべしすべからく日の入るを見て国史を説くべし。夫故に世の変を考へ人を教化する諸の事ども

公のうるる日乱あるべしと

九六　史とは書を整理して出役の官人。其史官の人の事ども記録とふべし。史記とは書なり。史記を略して記の字を不出国史をいふ。たとへば日本紀の続日本紀の日本国史とは是なり。日本紀又は国の史記とふ略して国史とも

いふべきなり。其国の出来の儒者とは

出来がたうあるべしおのおの文章を兼ねたるあるべく

文学あるべく和出人の別多くはべし史記をも漢

出あるべく書く。漢史とかくべきは雑記のごとし。又三国志

をもとの字に出づるなり。国をなべて地理のあるを

くわしく出来あり二十一史といふも志を書くも通

しく史官の出来少人二十一史と頌するあり

九七　異国の出る青牙籤の説。又白牙籤の説をいへ

り。唐土より多く書籍を持ち来る人あるべく山出籍

約束あるべ。儒者医者道者。詩集文章史記の

類をも包含する快を色を以て見るやうこそ

をゝろくよ源ちく也。後拾遺よ白牙籤青牙籤ゝ
ゝりしく偽玄道玄を見ゝ

百 いみへゝり立居振舞。又ハ人の行跡ゝ
悪き振舞ゝ様ゝるましきゝ人ゝ食
を饗ゝるゝ。振舞とゝゝ。左手記 的代
ゝり後の朝。真主ゝの善悪ゝり記ゝ
ゝ

百 侍の字主人の字ハ人ゝ侍ゝ不出士ゝ出ハ
ゝ出ハ士ゝ宋朝ゝ士ゝ後ハ逆士の悪ゝ
ゝ。朱子注ハ武士ゝ者ゝ。悪ゝ用
善ゝ志ハ士ゝ出べし。毒ゝ人ゝ侍ゝ出べし

侍ハ人ゝ侍ゝ出べし。侍ゝ
主ゝの所ゝ後所ゝ井ゝ
又職原抄の下巻ゝ侍ゝ古作ゝ
ゝ。侍ハ源氏物語ゝ厳ゝ侍ハ
ゝ家衆ゝ。侍所ゝ別当ハ武家ゝ

百三 玄和の帙古来ハ竹ゝ編むゝ作ゝ
和くしくゝ源氏物語ゝ作帙ゝ
玄和を義ゝ。其梅やゝ
外川退郡中山寺ゝ西ゝ清澄ゝ
荒神山ハ。先年井ゝ

出て銀の四角の箱にて。中に法華経十巻開巻
結巻こゝに納入く。十巻を。八道新大政大臣平朝
臣清盛公と奥書。此十巻を細き竹を金の
釘金にて編る帙に入くを。裏に絹をもて
あつらへる作りにて。桂く不見源氏物語の
竹帙いつれも

(亘)刀録を打日取のこと。中へ入るべきなり。
中右記に庚申を用ゐしこと。庚も申も皆金
なり。されば庚申を祭ると金と金とが相逢ひ
何変も災変のなきやうにとまもるなり。

藤原の家長日記に庚の日小打とあり。
鈔に水氣紙合を防ぐなり也。又室町家の法に成
とあり。されば土生金と。何よりも故なり
又移山や不知もあり。日取なるべし。枕唐漢
魏叢書の中に刀録録と云ものあり。又壺井先生
の本朝古今刀録録と云書をせられし。
堅く深深扨の通り。庚申の説をとりて金と金
とに能とあり。されば弓が公に云よる金なり。
室町家の方ではしく記をふく
(亘)茶越移の著のこと。今川駿河守義元の記

録よるべく。天文年中の故實に。料理のもてなし務の
箸とるを嫌ふ。小笠原流を用ひ。一汁三菜
二汁五菜まで。三の膳ハ一汁一菜まで。一汁五菜とも
せんこそであらふが菜紙を嫌ふ。喰ひ一二四二ヒ
四。三に何とぞ仙ねて拭出しくる次第は食べ。まんは
ちこのを紙しくもの。ふの菜を盛りをきらふ。
移箸も菜ち菜は渡るを嫌ふ。仮ハ相人
ちら菜をもて。食ハ第一の貴殿に論語も人良
のまよりこもめだとふ。
(五)一般ハ箱は焼杉を用ひ。悪い喪中の色和ゆ。本の

容を焼出ぶ。今の釈奠あり。貞観伝の
記して四巻あり。第三ハ焼杉古変は巻ハさぐ高
ちを。喪の送りものを。扱扇箱の紐を人は
書ハ。檀紙をしまる也。革を用ゐる変ちがし
巻中山山槐記あり。又扇は箱は直はあしを
くりはしるを。巻ハ十里より外へ貴人のとを人
ちをはるを。十里以外ハ墨を墨をる少人あり
十里より四ハ多ど墨を多ちを。遠近して禮の
遠あり
(六)式饅頭とは。并に三麪三義の。饅

頭素麺 蕎麦 まんじゅう汁を添へて喰 蕎麦
麺いろけく喰ふ 素麺ハ法もなく喰ふ 羊羹 鼈
羹 炉腸羹 製ハ文字の通りなり。右ものく喰やう
ありまんじゅう振出を二人より多くハ不成之客より
つくし 餐利饌出を 法もなく柿 赤鰯法もなく柿を
白豆腐之鰯もくハ梅干之箸にて鰯一口喰ふ 乾い
麸毒を消をゆへ。其箸にてもぐよ柿を食し。鰯
柿ハ青葉をしく膳ハ箸なし。右の汁ハ吸物
ありを引とすぐふ本膳を出をく
(夏)釘隠とゆふ名ハ。俗語也。古来鞆を打とゆふ

江次第西宮記延喜式多見也今俗巴を云唐
の巴水の故支也。一ツ巴。二ツ巴。三ツ巴。今ぐいさ或くの
絞をいゆへ巴ゆへ巴ゆへとい鞆繪の意也。平家物語
ハ鞆繪とあり。弓射的押手ハ掛るを鞆とゆふ。武
器の鞆ハ熊の皮也。伊勢神宝の鞆ハ鹿の皮なり
神代巻ハ稚威の高鞆とあり是也。小さき中着の
ものゆへ。万葉集にもの鞆の高とあり
(夏)膳部まるもの。香物附るもく。食菜の名也。香物ハ
多ハ汁ハ湯を吾的喰物ハ云ハ。本来の通用也。江次第
裏出みもの。大臣大饗の始も是歟也。五支根源ハ元日

一屠蘇散。二日度嶂散。三日白散。和気丹波より奉る。御肴を大根の輪切にし。屠蘇は若紀よりのこ見ゆる後取といふ人の上に上るを乗也。元日子ハ人と精進をすれどもと云く。古来の香物ハ大根に限る。大根にて口中の臭気を消臭をとる故香物と云。冬は大根を茄子なふつる。茄子やうのものは慈照院義政公の御物数寄といふ事を類香といふ

㊮盃はさかづきと読て左様読ては風雅ならずさかづきといふ。湯をのむものをゆのみと云。觴は角にて製るものし。其形くだるのおもむきし。盞は小さき盃し。卮は小盃にて盃は唐にて蓋を不盃し

南嶺遺稿巻之四　大尾

南嶺遺稿跋

吾邦自執政至衆庶以故実崇尚之不知為隆盛学故実変土異邦之文学而後本邦之故実者寡矣嗚呼遠之事梨校本嶺先生也

予謂詩道耳。最門人梓南
嶺子。今也拾其餘而為遺稿
予按此集書林某稼軒。故及
寶暦丁丑初冬
平安細合文[illegible]謹誌

傭字例
備中関鬼翁先生著　全一冊

此書ハ我國の古書ニ漢字を傭ひ用ゐたる例の紛らはしき限を挙て其由を注せられたる書ニて韻の誤あるを假字の用格ニて悟り古言の疑ひを韻書ニて弁じあまた発明むおほき書なれハ漢字三音考字音假字用格等の書ニ並べて古言と格と韻字とを明むるニ必用の書なり

紫式部日記釋
尾張清水大人著　松屋大人校正説　全四冊

此日記ハ源氏物語と同じ作者なれハ彼ものかたりを見給ふ人々あまたありてよく見えて作者の心をしらるゝ事おほきを昔より注さくもあらねハこの紀日記なとゝともにをしへくるへき此日記のよしをしるしたる注釋なり

笑ひ艸乃百くさ
賀茂季鷹縣主歌　全一冊
明遠堂御蔵板

消息文例
松の屋藤井大人著　全二冊

せうそこぶみの文例をあつめ註釋をくはへたるものにて藤井大人の考本文の要語あり

枕詞補註
尾崎雅嘉大人著　全二冊

此書ハ古くより用ひ来れる書どもの内より近世ニ用ゐる枕詞をいろはにわけて註釋をくはへたり

増補和歌まなびくさ
全二冊

和歌の詞并ニ枕詞をいろはにわけて註釋をくはへたり

新選和歌　一名貫之佗縫
全二冊

校正古語拾遺 齋部廣成著 全一冊

古語拾遺言餘鈔 伊勢尚舍先生編述 日向延陵先生重訂 全五冊

古語拾遺ト云ハ神代以後神社祭事等ノ古法ヲトリウシナヒシ事ドモヲ記セシ書ナリ其本書ニウタガハシキモノヲ明辨譯釋シテサトシタルヲ言餘鈔ト云

河中後 契沖阿闍梨著 全五冊

たゞえふ河社の事と書出せる隨筆也よりてかく名付くゝり竹取うばぞの三下六人集神樂催馬樂二十一代集等の事其外往くの事ども古書を引く論ぜり

日本紀歌之解 荒木田神主久老撰 全三冊

文苑玉露 全三冊 蓮阿法師編 加茂季鷹序

此文苑と標したる森羅萬象ようとうて義為乃面よりとうしてのて賀沖先生圖宣長ものれ名りよおの大人の浦島又ハ臣あるるる面いのおとれ那ゆくの紀あるい序跋ものと拾ひたる書名るる為いふ（抱朴子等ものと申ふいを稱てふとうり為くまものあるうふ大人遊りあみうやくゝ学のふうものとき為くれ書名り

大和物語抄 北村季吟著 全六冊

此書ハ延德二年六月禁裏の御本と雅俗都書写せしも特或ハ小常の切り外なる事らくゝ切ると切抜の表ものとせり承應二年五月季吟大人の自序自跋なり

秋齋桂先生著述書目

南嶺子 全部四冊

南嶺遺稿 全部四冊

秋齋間語 全部四冊

神明憑談 全部二冊

心齋橋南久太郎町 河内屋喜兵衛

同 南久宝寺町 河内屋八兵衛

大坂書林